

# 色んな意味で怖い本

「怖い」という感情は、他の感情と比べて反射的に作用するものらしい。私たちが危険を回避するために、瞬時の判断が求められるからだ。今回はその「怖い」という感情に注目する。非現実的で怖いけれどもちよつと笑えるものや、現実的だからこそゾクッとしてしまう本を紹介する。

## 『クセがつよい妖怪事典』



佐古文男/画と文、荒俣宏/監修、小学館、2018年、所蔵：江古田

非現実的で怖いものの定番と言え、幽霊やお化け、妖怪かもしれない。本書は、怖いはずの妖怪をポップにまとめた一冊だ。1000種類を超えると思われる妖怪の中から選ばれた80体が収録されており、妖怪ごとにクセの強さが5段階で表示されている。ぼそぼそしゃべるだけの地味すぎる2人組妖怪「川男」(クセの強さ1)、自分の芸がウケないと暴

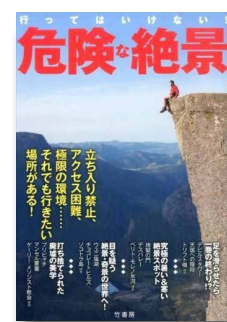
れだす「五体面」(クセの強さ5)など、彼らの「クセ」の魅力がいっぱいだ。水木しげる氏とも親交のある、佐古文男氏のイラストとともにお楽しみあれ。



ロジャー・ラックハースト/著、福田篤人/訳、エクスマレッジ、2017年、所蔵：中央

いものにしてはいる。ゾンビは足取りがゆっくりで知性を持たないというイメージだ。それがある作品では走り、また別の作品では意識や知性を持つ…。ゾンビとは結局どういう存在なのだろうか。そんな謎多き彼らの「最強完全ガイド」に興味がある方は、一度手に取ってみてほしい。

## 『行ってはいけない! 危険な絶景』



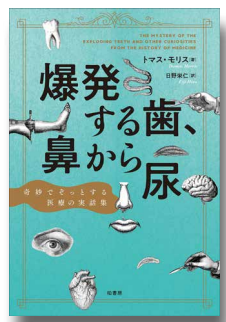
竹書房、2014年、所蔵：鷺宮

自然の素晴らしさを感じる事ができる絶景は、ぜひ見てみたいものだ。だが、そこに危険が伴うならば話は別になる。

本書では、世界の危険な絶景を「高所」、「灼熱と極寒」、「異世界」、「廃墟」の4つの項目に分けて紹介している。ほとんどの場所は海外だが、「廃墟」の章で唯一日本のある場所が紹介されている。それは和歌山県にあ

る友ヶ島である。明治時代から軍事要塞が築かれていたこの島は、第二次世界大戦終結まで民間人の立ち入りが禁止されていた。当時は地図に載っていない場所である。明治後期の最新技術を駆使して作られた砲台が見どころだが、島への移動手段は限られ、飲用の水もない。また足元が悪い場所もあり、探索には十分な備えと注意が必要だ。

実際の場所に行くには危険が伴う可能性がある。安全な場所での本書を楽しむのがおすすめである。



トマス・モリス/著、日野栄仁/訳、柏書房、2019年、所蔵：野方

## 『爆発する歯、鼻から尿』

日々医療は進歩しているが、治療法が確立していない時代には、現代では信じられない治療が施されていた。

本書は著者が多くの論文を読み、その中から選んだ奇妙でゾクとする

症例や治療を紹介した実話集である。1635年、あるプロセイン人の農夫が、胃のムカつきを解消するためナイフの柄で喉奥を刺激して嘔吐を誘発しようとした。そのうちに手を滑らせてしまい、ナイフは胃に到達してしまった。そこでナイフを取り出す手術が行われる。それは腹部の切開という方法だったが、患者の意識はある状態だったらしい。

このような話が多数掲載されているのだが、怖さだけでは終わらないのが面白い。それは読者が抱く気持ちを代弁するような著者の巧みな「ツッコミ」のおかげだ。

※プロセイン：現ポーランド北部からカリーニングラード州・リトアニアにかけて広がる地域

## 『毒がよくわかる毒のきほん』



五十君静信/監修、誠文堂新光社、2015年、所蔵：上高田

毒は怖い。それは生物に害を与える物質だからだ。私たちの身近にある食べ物でも、食べるタイミングや調理法を間違えば毒となる場合がある。病気を治す薬もまた、用法用量を間違えると危険だ。

歴史を紐解くと毒にまつわるエピソードが多くある。例えば、かのクレオパトラ7世は毒に深い関心を持ち、さまざまな毒の効果を囚人で試していたという。その彼女が敵に追い詰められ自らを毒へびに噛ませた話は有名だ。また、古代ローマ人は酸っぱいワインを鉛の鍋で加熱すれば甘くなることを発見した。ワインの中の酸味成分が鉛と結びつき甘い成分に変化するのだが、有機鉛という有毒な化合物が生み出されている。古代ローマ人は知らずにそのワインを飲み、鉛中毒になっていた。

本書ではこれらの歴史上の出来事以外にも、項目別に毒について分かりやすく解説された「毒の入門書」である。



※本誌の掲載内容・お知らせ情報は記事作成当時のものです。

## 怖いけど行きたい!? お化け屋敷

お化け屋敷といえば、どのようなイメージを持つだろうか？火の玉が飛び墓場や幽霊などがいる場所を、自分の足や乗り物で回ったりする…そんなイメージが浮かんだ人もいるだろう。筆者はお化け屋敷が苦手だったため、自分で歩かなければならないときは怖そうな場所を避け、乗り物であれば目を閉じたままやり過ごした記憶がある。だが、この方法は最近のお化け屋敷には通用しないようだ。参加者がミッションを課せられるため、自ら怖い場所へと赴かざるを得ないという参加型ホラー・メイズに変化しているらしい。怖いものの好きの友人に誘われた際は覚悟が必要かもしれない。

### 参考文献

- 『「超常現象」を本気で科学する』石川幹人/著、新潮社、2014年、所蔵：中央・江古田
- 『お化け屋敷になぜ人は並ぶのか』五味弘文/著、角川書店、2012年、所蔵：中央
- 『お化け屋敷で化学する』日本科学未来館/協力、扶桑社、2011年、所蔵：上高田
- 『お化け屋敷のつくり方』平野ユレイ・齊藤ゾンビ/著、アールズ出版、2011年、所蔵：中央